

緊急事態宣言中の開催となりました第34回夏期研修研究会(2021年9月9日ほか)は全面オンラインにて行われました。



私立大学環境保全協議会  
Environmental Protection Association of Private Universities

### 私立大学環境保全協議会 「第34回夏期研修研究会」

<p><b>ライブ配信</b></p> <p><b>9/9(木)</b> オンライン講演会</p> <p><b>9/13(月)</b> オンライングループ討議</p> <p><b>9/16(木)</b> グループ討議</p>	<p><b>オンデマンド配信</b></p> <p><b>[9/16~30]</b></p> <p><b>[ライブのみ]</b></p>
--	--

**【第1部】講演会 9月9日(木)**

1. 開会挨拶 13:00-13:10  
酒井 吉彦
2. 講演 13:10-14:00  
カーボンニュートラル達成に向けた我が国の動きと大学等コアリション、私立大学への期待  
文部科学省 研究開発局 環境エネルギー課 課長補佐 酒井 吉彦
3. 講演 14:10-15:00  
大学にとってのカーボンニュートラル実現に向けての方向性  
慶應義塾大学 教授 理工学部 システムデザイン工学科 理工学研究科 開放環境科学専攻 空間・環境デザイン工学専修 主任 伊香賀俊治
4. 講演 15:10-16:00  
人間共存ロボットは実現できるか？  
〜ムーンショット早稲田AIRECプロジェクト〜  
早稲田大学 理工学術院長 創造理工学部 総合機械工学科 教授 次世代ロボット研究機構 ヒューマン・ロボット共創研究所 所長 菅野 重樹
5. 閉会挨拶 16:00~16:10

**【第2部】グループ討議**

◆Iグループ：教育と連携  
9月13日(月) 14:00~16:30  
「食品ロス削減に向けた大学の取り組みを考える」  
1. 主旨による趣旨説明、参加者全員による自己紹介等  
2. 食品ロス削減に向けた政府・自治体・企業・市民等の取り組み 白鳥 大学 社会学部 教授 飛田 浩  
3. 食品リサイクルの取り組み〜循環型社会の構築をめざして〜 ㈱東京クリアセンター 業務本部 部長 田波 猛志  
4. 質疑応答を含む意見交換

◆IIグループ：化学物質  
9月13日(月) 14:00~16:00  
「新実験棟建設に向けた対応について」  
1. 新たな施設を建設する際の留意点について 清水建設㈱ 教育・文化施設設計部 グループ長 大西 宏明  
2. 新棟建設における高圧ガスの留意点 有堂薬業 営業課 課長代理 藤井 洋行  
3. 新棟建設における高圧ガスの留意点 ㈱巴南会 技術本部 技術営業部 土屋 翔太郎 吉田 憲司  
4. 3グループに分かれての意見交換  
A. 排気設備 B. 高圧ガス C. 薬品  
5. 各グループからの報告・総括

◆IIIグループ：施設・設備  
9月16日(木) 14:00-16:00  
「カーボンニュートラル 脱炭素社会の実現に向けて大学ができる貢献について考える」  
温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、2050年カーボンニュートラルの実現に向けて大学ができる事について、講演やコーディネーター、会員による情報提供・事例報告を踏まえて意見交換します。

詳細は私大環協ホームページもご参照ください。

私立大学環境保全協議会 第34回夏期研修研究会 (2021.9.9)

## カーボンニュートラル

### 脱炭素社会実現に向けて大学ができる貢献





**伊香賀俊治** 慶應義塾大学 理工学部 教授

日本建築学会 副会長/SDGs対応推進特別調査委員会 委員長/脱炭素建築・都市タスクフォース 主査  
文科省 大学等における省エネルギー対策に関する検討会 委員  
国土省・経産省・環境省 脱炭素社会に向けた住宅・建築物における省エネ対策等のあり方検討会 委員

講演会は前回同様 Zoomウェビナー機能により配信し、後日オンデマンドでもお届けしました。また、初の試みとして、ライブ配信の講演の休憩時間に、賛助会員の紹介動画を配信しました。



### グループ討議の様子(Iグループ)

Zoomミーティングでグループ内講演を聞き、意見交換を行いました。盛りだくさんの内容で、発言も活発にあり、参加者のアンケートでは各グループとも「時間が短い」という意見が多く見られました。

第38回総会・研修研究会は2022年3月に早稲田大学にて対面を中心とした開催を予定しております。  
p8「事務局だより」をご覧ください。

## CONTENTS

環境ニュース●菅野元行教授インタビュー	2
会員校紹介●日本工業大学	4
会員校紹介●慶應義塾大学	5
賛助会員紹介●積水マテリアルソリューションズ株式会社	6
賛助会員紹介●株式会社中村・フクイヤ	7
コラム、事務局だより	8

## 実践女子大学 生活科学部 現代生活学科 菅野 元行教授 インタビュー



何となくでも自分と向き合い続けられ、  
振り返ったときに道が形作られているのに気づく

幕末から始まる明治維新、第二次世界大戦での敗戦、戦後復興の象徴と言われる1964年の東京オリンピックなど、歴史を振り返ると、私たち日本人の生活様式や考え方に大きな影響を与えた出来事が数多く存在します。近年で言えば、東北地方を中心に甚大な被害をもたらした東日本大震災もその一つです。

日本大学准教授を経て、2014年から実践女子大学生生活科学部現代生活学科に着任し、『環境とエネルギー資源』を題材に教鞭を執る菅野元行教授もまた、10年前の“3.11”をきっかけに研究から教育へ軸足を移しました。

「そもそも調べることが大好きだった私は、図鑑が擦り切れるくらい読むほど日本史が大好きで、高校生の頃は歴史学者になりたいと思っていました。ですが、大学に通っている先輩から歴史の研究者の道は険しいことを聞かされ、早々に諦めてしまったんです」

また当時、歌手の尾崎豊にハマっていた菅野教授。『Bow!』という曲の『サラリーマンにはなりたかねえ 朝夕のラッシュアワー 酒びたりの中年達 ちっぽけな金にしがみつ きぶらさがってるだけじゃ』という歌詞に影響を受けたそうです。

「新卒入社で終身雇用という既定路線を歩む人生、卒に収まる自分に面白みを見出せなかったから、会社員にはなりたくなかったんです。カッコいいこと言っていますが、高校のときの私は、文系よりは理系の大学という漠然とした思いはあったものの、物理は赤点、化学は及第点と、理科系の成績は惨憺たるもの。歴史学者、サラリーマン、物理……と、可能性というか、選択肢を削っていった結果、残った化学に頼っただけなので、大学に入学した当初は、自分が研究者になっている姿はまったく想像できませんでした」

こうした背景から、日本大学理工学部工業化学科に入学してしばらくは授業に興味・関心がわかず、大学にこのまま居座るべきかどうか悩んだと言います。「座学が中心で、心躍る発見もない。受講者全員が同じ方法で取り組む実験科目には気分が乗らなかった」と話す菅野教授が、研究者の魅力はじめて触れたのは大学四年生の頃だったそうです。

「3年生までの実験科目で行っていた実験と違い、研究室

に配属されてからの研究は、研究室の運営も任されたうえに、実験のテーマや手順を自由に決めることができ、研究の時間も無制限。失敗はつきものでしたが、そのたびに新しい気づきがあり成長も実感でき、研究に打ち込む日々はとても充実していました。大学院では論文や学会で当時の最先端の研究を見聞きすることができましたし、また私の修士論文である『石炭を原料にした石油代替エネルギーの生産に関わる研究』が学会誌に掲載されたことも研究者を強く志すようになった大きなきっかけと言えます」

修士課程修了後、所属していた研究室の助手となった菅野教授は、研究者として第一歩を踏み出します。これまで、およそ50に及ぶ学術論文をはじめ、燃料化学の英文誌での論文掲載、さらに国内や国際会議での発表など、石油代替燃料・再生可能エネルギーの研究分野の第一線を担ってきました。そんな菅野教授に転機が訪れたのは、今からおよそ10年前。未曾有の被害をもたらした東日本大震災と、それに伴う福島第一原子力発電所事故の経験がきっかけです。

「それまで私は、プラスチックやアスファルトなどの有機化合物、食品廃棄物や下水汚泥などのバイオマス資源といった、さまざまな資源から液体燃料を生み出す研究に没頭してきました。ですが、3.11をきっかけに再生可能エネルギーへの風潮が強まるなか、重箱の隅をつつくような研究に疑問を持つようになったんです。自問自答を繰り返しているうちに、『化学という小さい世界から飛び出し、環境という幅広い領域に関わりたい』『環境やエネルギーの問題が、社会や生活、経済に深い関わりがあることを学生に教え、これからの社会の環境問題を解決できる人材を育てたい』という思いが強まっていき、研究から教育に重心を移すことを決断しました」

**私自身が得意ではなかった理系科目。  
学生の気持ちに寄り添った授業を届けたい**

研究から教育に軸足を移し、環境・エネルギー領域に詳しい次世代の人材を育成する菅野教授。学生たちに環境・エネルギーに関心を寄せてもらうためにさまざまな工夫を凝らした講義は、学内でとても好評だそうです。



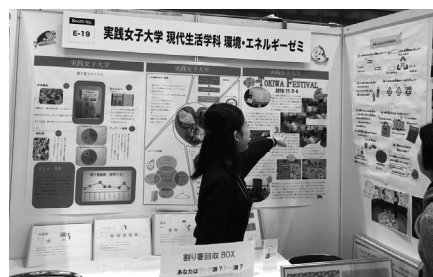
「数学、化学、物理という言葉を聞くだけで、拒否反応を示す学生は少なくないですからね。例えば、小中学生向けにニュースをわかりやすく解説した月刊誌『Newsがわかる』に掲載されている記事を紹介したり、日本経済新聞の国際、経済面に載っているエネルギー問題や環境・エネルギーの自然科学を解説した記事も紹介しています。他にも、『オーロラはどうして生まれるのか』『日焼け止めのSPF50や、PAの後についた+の数にはどんな意味があるのか』など、身近な現象や話題をたくさん引用しながら講義を進めるようにもしています。任意ですが、科学館の見学レポートを促すこともあります。かつての私も物理、化学は得意ではなかったことから、学生の気持ちは痛いほどよく解る。なので、授業では、環境・エネルギーがいかに社会と密接に関わっていて、身近な問題であるか。少しでも苦手意識を払拭できるような授業を心がけています」

一方のゼミでは、一般科目より専門性をとことん突き詰めていきます。それゆえに活動も多岐にわたります。

「毎年12月に東京ビッグサイトで開催される“エコプロ”があります。環境に配慮した製品やサービスに関する日本最大級の一般向け展示会です。ここに、3年前からゼミ活動の環境として参加。『ペットボトルのキャップ、割りばし、コンタクトレンズケース、スポンジ、歯ブラシなどの回収に関する報告書』や、『海洋プラスチックごみ問題、エコバッグの作り方、エコ×エネ体験ツアー参加記など、学内で取り組んできた活動内容をまとめた環境報告書(サステナブルレポート)』などを発表しています。



2021年のゼミの様子



2018年、エコプロにゼミで初めて出展



実践女子大学  
サステナブルレポート  
#JJエコ娘レポート2020



実践女子大学サステナブルレポート2020

ペットボトルキャップの回収箱を、ディズニーランド派？それともディズニーシー派？といった投票箱に見立てることで回収率をグッと高めたようなユニークな切り口の検討が多いので、周囲からの関心も高く、企業や他大学とのつながりも生まれています」

学生の豊かな発想やアイデアに驚きの連続で、逆に刺激を貰っていると菅野教授は言います。

## きっかけは目の前にいつも在る。 手を伸ばして掴むかは自分次第

地球にやさしい——。環境・エネルギー問題を考えるときに必ずと言っていいほど聞くフレーズです。しかし、菅野教授はこの常套句に警鐘を鳴らします。

「かつて、経済発展を優先して工業廃水を垂れ流した結果、自然が汚染されて公害が生まれました。そして近い将来、地球温暖化によって集中豪雨や土砂災害の頻発、海面上昇、感染症、食糧危機など、さまざまなリスクがもたされると言われています。ですが、環境の変化によって脅かされるのは地球ではなく、私たち人間です。つまり、地球に優しいのではなく、私たちに優しい。他人事ではなく、当事者意識を持って環境に向き合って欲しいので、講義では“地球に優しい”という言葉に対して、どう思っているのかを学生に問うようにしています」

また、研究と同じで、失敗が学びや成長のきっかけになること。多聞は一見に如かずの重要性など、多角的、横断的に環境問題にアプローチしてより良い社会の仕組みを生み出せる替えがきかない人材育成を目指していると言います。

「社会は閉ざされておらず、開かれていること。世の中、知らないことだらけであること。そうした実例を一つでも多く伝えるようにしています。また、J-POWERが主催する水力発電所や火力発電所への二泊三日の見学ツアーもそうですが、知るきっかけは手を伸ばせば届く距離にあること。その情報を掴むかどうかは自分次第で、その少しの行動が後々大きな“差”を生むことを少しでも理解してもらえたら嬉しいです」

研究と同様、成果や成功は先にあります。菅野教授は、そこに少しでも近づくために必要な考え方やスキルを、ゼミや講義を通して伝えてくれようとしているのです。

### インタビューを終えて

お城や歴史博物館、科学館が大好きな菅野教授。学会で地方に出張するときは、立ち寄るようにしているそうです。特に日本史はかなり詳しく、化学や日本史に関する番組を好んで見ているようです。また、大阪市中之島地区にある大阪市立科学館もおすすめとのこと。

## 日本工業大学

### 大学紹介

日本工業大学は1967(昭和42)年、埼玉県宮代町に開学した3学部の大です。

環境活動においては、2001(平成13)年にISO14001を認証取得、18年間継続した後、2018(平成30)年6月からは、NIT-EMS(日本工業大学環境マネジメントシステム)として自己宣言を行い、独自のEMS活動を展開しています。



正面玄関(ロータリー)

認証取得と同じ2001年には学生組織として学生環境推進委員会も発足しました。また、2020年には全学組織のSDGs委員会を設置して、社会課題解決に向けた幅広い活動に取り組んでいます。

### SDGs・EMS活動(1)

学生環境推進委員会のメンバーと、一般のSDGsに関心の高い学生有志との連携で、本年6月には「SDGsキャンピングin日工大」を開催。SDGsの各ゴールに該当する「社会課題」は何かを考えることから始め、自分ごととして課題解決まで考えるテーマ(SDG-12: 食料廃棄物削減)を選定してワークショップ(WS)を行いました。



バイオメタンガス発酵装置

WSでは身近な学食を例にとり、食材調達～運搬～製造～販売～食べ残し処理の工程全域で、食料廃棄の削減につながる解決策を検討しました。食料残渣の処理については、議論だけに留まらず、実装されている近隣農家のバイオメタンガス発酵装置の技術勉強会や循環型農業の現場見学を行い、WSを締めくくりました。



参加者集合写真

秋学期に行われる第2回のSDGsキャンピングでは、初回テーマの課題解決を提案書としてまとめ、学食を運営する企業に提出する計画です。

また、SDGsキャンピングの終盤から参加していただいた地

元企業との地域連携を進め、バイオメタンガス発酵装置の社会実装の可能性についても参加学生とともに検討し、食料廃棄物削減を進めていきます。

### SDGs・EMS活動(2)

「全国学生清掃週間」NSCWeek(National Student Cleaning Week)を開催。NSCWeekは新潟環境ネットワークN-econetと本学の学生環境推進委員会(愛称:e-にこっと)

の共同イベントです。

近年、世界では環境問題に対して多様な取り組みが進みつつありますが、日本の若者世代の意識は欧州に比較して少し遅れを取っている状況です。そこで、全国の学生達が、海洋プラスチック問題についての知識を習得し、実際に海岸や川辺の清掃活動を行うことで問題解決に貢献することを目的としてこの企画を立ち上げました。

今回のNSCWeekは、9月12日から9月19日の1週間にわたり、新潟と埼玉をリモートでつなぎながら活動を行う初めての取り組みです。この活動の目的のひとつであるSDG-14(海の豊かさを守ろう)の目標達成に向け、下記の3部構成で実施しました。

① 9/12[Study Day]…「海洋とプラスチックの課題」をテーマに本学の雨宮隆教授による講演を開催。プラスチックの種別や回収されたペットボトルのリサイクル方法、海洋にもたらすプラスチックの影響などを学んだ後、参加者27名が6班に分かれ、アイスブレイクでコミュニケーションを図りました。

② 9/13～9/18[Clean Activity]…新潟の学生は関屋浜(せきやはま)周辺、本学学生は宮代町の遊歩道沿いの川を中心に、プラスチックなどのゴミ拾いと、それぞれの水質(BOD・COD)の簡易測定を実施しました。



新潟の海岸

③ 9/19[Presentation Day]…最終日は、ゴミ拾いの実績や水質調査結果から、海と川の違いなどを考察し、結果発表と意見交換を実施し、最後のフリートークでは、学生生活の身近な話題で大いに盛り上がりました。



宮代の川

今回の企画は、環境問題についての知見や経験を広げるだけでなく、互いの地理的距離を感じさせない学生同士の親密な交流が実現し、楽しい活動となりました。今後は、賛同する全国の学生の輪を拡げて行きます。

### SDGsの今後に向けた活動と地域連携

2021年から2030年までの本学の中長期計画「NIT VISION 2030 実工学新時代-変わる教育、変わらない理念」のもと、さまざまな社会連携事業を「教育プログラム」に位置づけ、地域で困っている人に寄り添い、「誰一人取り残さない」というSDGsにも寄与する活動を支援する組織「人と暮らしの支援工学センター」も立ち上げ、社会貢献活動を推進しています。

\*「日本工業大学のSDGsへの取り組み」

<https://www.nit.ac.jp/sdgs/#!page1>





# 慶應義塾大学



## 大学紹介

慶應義塾は1858年、福澤諭吉が江戸に開いた蘭学から始まりました。創立から160年を超え、現在は小学校から大学・大学院を擁する、日本で最も長い歴史を持つ総合学塾です。大学は東京都、神奈川県に6キャンパスがあり、10学部と14の研究科を擁します。学生数は33,400人強、教員数は2,700人強です。

## 環境への取り組み

「慶應義塾環境理念」を掲げ、環境をテーマにしたシンポジウムや講演会の開催、各キャンパス・校舎におけるグリーン化実現のためのさまざまな省エネルギー対策などを推進しています。また、学校林として全国に約160ヘクタールの山林を管理しており、学生・一貫教育校生による植林・育林も盛んに行っています。さらに、「福澤育林友の会」主催による講演会「森を愛する人々の集い」を2001年度から開催しています。学生の活動としては、2002年度より公認学生団体「環境サークルE.C.O.」を中心に、毎年日吉キャンパスにて「環境週間」を実施しています。



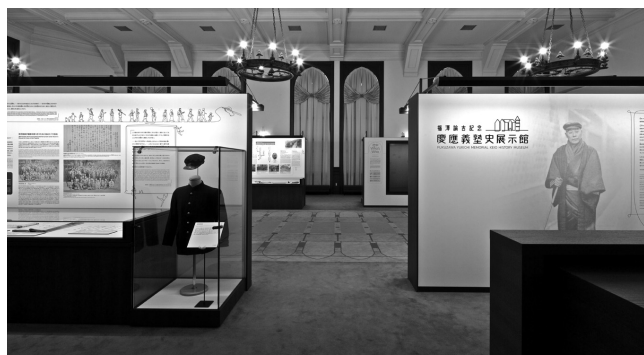
## ミュージアム施設

慶應義塾は、160年を越える歴史の中で、多様な領域にわたる文化財コレクションを形成してきました。複数の重要文化財も含むこれらのコレクションは、慶應義塾のさまざまな場所に収蔵され、活用されています。キャンパスのミュージアムや展示スペースでは、専門性を活かしたユニークな展覧会が開催されて

いるほか、文化財を使った授業も行われています。

慶應義塾ミュージアム・ commons は、塾のコレクションを相互に結びつけ、コレクションに関わる人々の交流を生み出す大学ミュージアムです。

また、福澤諭吉記念慶應義塾史展示館では、創立者である福澤の生涯と160年にわたる慶應義塾の歴史が展示されています。



## 施設建設（日吉記念館建て替え）

日吉記念館は、慶應義塾創立150年記念事業の一環として建て替えが計画されました。この計画は2009年にいったん延期された後、2017年10月に再開され2年半にわたる



工事を経て2020年3月10日に竣工しました。新・日吉記念館は、地上4階・地下2階建て、延べ床面積は旧記念館のおよそ倍にあたる約1万2,500㎡、立ち見席を除く最大収容人数は約6,500人から約1万人へこちらも大幅に増えました。規模だけでなく、車いすの方のための観覧スペースなどバリアフリー化がなされ、アリーナに空調機が設置されるなど、利用者にとってさらに快適な空間に進化しています。

## 慶應義塾環境理念

慶應義塾は教育・研究・医療における活動において、地球環境の保全と持続可能な循環型社会の発展に貢献します。また、教職員、塾生のひとりひとりが、地球生態系の一員であることの自覚と責任を持って、環境改善活動を推進します。

# 賛助会員紹介

## 積水マテリアルソリューションズ株式会社

# SEKISUI

SEKISUIは、自ら成長することで世界のサステナビリティに貢献し続ける企業です。



今夏より賛助会員になりました積水化学100%子会社の積水マテリアルソリューションズ(株)です。積水化学グループでは早くから環境経営を進めてきました。2006年には自然環境課題の解決に貢献する製品の創出・拡大を後押しする独自の製品評価制度を「環境貢献製品」として制定。2017年には対象領域を社会環境に拡大、2020年には収益性、持続性なども向上させ、課題解決を持続していけるよう「サステナビリティ貢献製品」として制度を進化させました。本制度ではお客様の使用段階で課題への貢献度が高い製品を登録し、社外有識者との対話によって基準の透明性や登録の信頼性を担保しています。長期ビジョンVision-2030のもとサステナビリティ貢献製品の売上高拡大をコミットし、2030年には業容とともに貢献度も倍増できるよう、SEKISUIはサステナブルな社会の実現に向けて、LIFEの基盤を支え、“未来につづく安心”を創造していきます。

※SDGsのアイコンは、各カンパニーの主要な課題解決に関連したもののみ表示しています。

### 住宅カンパニー

街への広がりを意識した高性能な住宅・住関連サービスの提供で、人々の安心・安全・快適な暮らしを支えています。

エネルギー自給自足推進住宅「おひさまハイム」

SEKISUIが描く未来の街づくり  
[SEKISUI Safe & Sound Project]  
(埼玉県朝霞市のイメージ)

フラクタル構造の日よけ材「エアリーシェード」

### 環境・ライフラインカンパニー

インフラにおける課題を多様な製品・サービスでグローバルに解決し、社会基盤を支えています。

水道配水用ポリエチレン管「エスロハイパーJW」

合成木材「FFU」

管路更生工法「SPR工法」

### 高機能プラスチックカンパニー

高付加価値材料で社会・暮らしを進化させるとともに、様々な機器の発展を支えています。

放熱絶縁シート

自動車向け合わせガラス用中間膜「S-LEC」

耐火材料「ファイブロック」

私たち積水マテリアルソリューションズ(株)は、高機能プラスチックカンパニーの販売会社です。併せてケアマテリアル製品の開発・製造・販売・評価試験で課題解決に取り組んでいます。抗ウイルス剤『ウィルテイカー™』はヒトの細胞に類似したイオン基でウイルスを捕捉しリスクを低減します。建材や日用品など幅広い分野で活用されています。

もっと詳しく！  
ウィルテイカー  
動画はこちら→



ナウケアプラス  
ホームページ  
お問い合わせはこちら→



そんなウィルテイカーを配合した抗ウイルススプレー『ナウケア™』は効果持続最大1カ月。さらに残存成分をブラックライトで可視化できる『ナウケアプラス』を揃えました。社会活動を止められない公共機関や工場などの不特定多数が入れ替わり使用する共有部の除菌工数削減で貢献しています。

会員校のみなさまには特別プランで貢献させていただきます。試験会場、対面授業再開、アフターコロナの除菌工数削減にご活用ください。QRコードのホームページからお気軽にお問い合わせください。

# 株式会社中村・フクイヤ

## 1, 環境浄化ビジネスに参入した経緯

1998年弊社の前身である株式会社中村が、自社製造品の造花に光触媒を塗布し、ペット臭や室内の嫌な臭いの消臭という機能を造花に付加した光触媒フラワーを製造したことが、環境浄化ビジネスに参入したきっかけです。光触媒は、文字どおり光や紫外線が照射されないと触媒が機能しません。

そこで、弊社では、紫外線・光・空気などの要素に左右されない「オリジナルな触媒」を開発することに着手、2008年に完成したのが、「UDDナノダイヤモンド触媒」であります。

## 2, UDDナノダイヤモンド触媒とは?

UDD(超分散ナノダイヤモンド)は特殊製法(爆射方法)により製造されたナノサイズのダイヤモンドを意味します。UDDの製造には、TNTとRDXという特殊な火薬を無酸素・高圧力の状態で爆発させる必要があります。

UDDナノダイヤモンドの大きさは4~6ナノメートルで、コロナウイルスが100ナノメートルに対して25分の1と非常に小さいものです。

光触媒や空気触媒等多くの触媒は、「活性酸素」を発生させることによって抗菌・抗ウイルス効果を発揮するのにに対し、UDDナノダイヤモンドは、下図2で示すようにウイルス等から電位を奪うことによって不活化します。

UDDナノダイヤモンドは、活性酸素を発生させない唯一の触媒として安全性を担保しています。

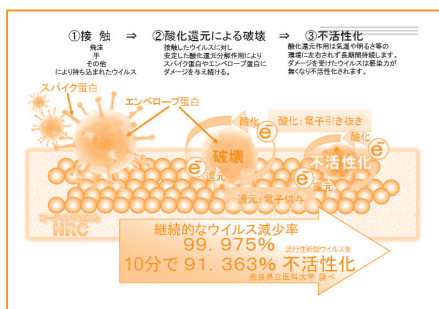
## 3, 施工の実績

当社の最大の実績は、国内大手航空会社が保有する全ての航空機の機内への施工実績です。これは、米国ボーイング社やEUエアバス社の安全承認を取得している事に起因しますが、超精密機器の集積体である航空機内に施工できる事は弊社のブランドとなっています。

これ以外に東京日本橋のマンダリンオリエンタルホテルのロビー・全客室も施工させていただいております。また、トイレの防臭・抗ウイルス抗菌施工においては、JR各社・東京メトロにおいて10数年にわたる実績がございます。



①航空機内の施工風景



②UDDナノダイヤモンド作用機序



③コロナウイルス治験結果

社名：株式会社 中村・フクイヤ

住 所：愛知県海部郡大治町花常字堀之内境34-1  
URL: <https://www.fukuiya.co.jp/>

連絡先：052-444-4616  
代表者：山田 幸子 (やまだ ゆきこ)  
創 業：2008年4月



Post-corona時代を明るく楽しいものにしましょう

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第5波も漸く下火になり、緊急事態宣言や蔓延防止措置が解除された事もあり、久しぶりに世の中に活気の兆しが見られます。今は、やがて始めると予想される第6波までの貴重な瞬間かも知れませんが、准リラックスタイムを楽しみたいと思います。私の専門が分離科学である所為か、時間軸に対して感染者が増減を繰り返す棒グラフの集積は、あたかもクロマトグラムのように見えます。差し詰め、固定相は地域の活動空間、移動相はその地域に漂う大気、溶質は多種多様な住人、検出器はPCR装置、抗原検査機、抗体検査機などでしょうか。この様にして得られる“コロナクロマトグラム”を見てみると、感染者の数から構成されるピークが何故ほぼ左右対称になるのか、何故第（n-1）波、第n波、第（n+1）波の相互の間隔がほぼ一定になるのか、など不思議な現象が目につきます。そのうち、どなたかが合理的な説明をして呉れるのではないかと期待しています。

さて、長い目で見れば、過去にあった天然痘、黒死病などのパンデミックな感染症の歴史に有る様に、コロナ禍も何れは確実に消失

します。その時、Post-coronaはどのような社会になっているのでしょうか。私達は現在のWith corona時代であって、数多くの不都合と予期しない便利さ（New Normal）を経験しました。最早、Pre-coronaには戻れないパラダイムシフトが起こっているのです。それでは、来るべきPost-corona時代はどんな社会になるのでしょうか。ここでは、Post-corona時代を明るくものとするであろう、2つのスローガンをご紹介します。1つは、「Green recovery」（緑の回復）で、COVID-19で落ち込んだ経済復興策としてEUなどが主導するものです。脱炭素社会の実現など地球環境問題の解決、雇用の創出、より良い暮らしへの移行、などが柱となっています。もう1つは、国連が掲げる防災ガイドライン「Build Back Better」（より良い復興）で、第3回国連防災会議で採択された「災害リスク削減のための仙台枠組み 2015-2030」で提唱されたものです。「Green recovery」と「Build Back Better」の実現を目標にして、Post-corona時代を迎えたいものです。

私立大学環境保全協議会 顧問 中村 洋  
(東京理科大学 名誉教授)

事務局だより

第38回 総会・研修研究会ご案内

【会場】

早稲田大学研究開発センター(121号館)  
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町513  
TEL 03-5273-9605(私大環協事務局)



【総会】(対面・ライブ配信)

2022年3月17日(木) 13:00~13:30

(議事) 2021年度活動・決算報告・新会員紹介等  
2022年度活動計画・予算・次期役員審議等

【研修研究会】(参加費：1名 5,000円)

【第1日】 2022年3月17日(木) (対面・ライブ配信)

- 1. 開会挨拶 13:40~13:50
- 2. 開催校挨拶 13:50~14:00
- 3. 講演 14:00~14:50  
<休憩 5分>
- 4. 講演 14:55~15:45  
<休憩 5分>
- 5. 講演 15:50~16:40
- 6. 講演総括 16:40~16:50
- 7. デモ展示・懇話会 17:00~

【第2日】 2022年3月18日(金) (対面のみ)

- 1. グループ討議 9:00~11:30

※I~IIIグループから一つ選択してご参加ください。

I：教育と連携「カーボンニュートラル達成に貢献する大学等コアリションについて」

2050年カーボンニュートラルの実現に向けて、大学はどのような連携・貢献ができるでしょうか。ゼロカーボン・キャンパス、地域ゼロカーボンや人材育成など、コアリションに参画する大学による取組事例の紹介講演を参考に、情報交換と意見交換を行います。

II：化学物質「新実験棟建設やゼロエミッション化に向けた対応などについて」

前回のグループ討議で取り上げた、新実験棟建設に向けた対応や、化学物質管理におけるゼロエミッション化、最近見受けられる毒劇物紛失事例なども踏まえ、複数のグループに分かれて、テーマに応じた意見交換や専門的な見聞

らの講演を行うことを予定しています。

III：施設・設備「2つのキーワードから大学の施設・設備を考える」

ウイズコロナ時代を迎えて、大学の施設・設備環境はますます多様で厳しいものが求められます。このグループでは最近のトレンドである「DX(デジタルトランスフォーメーション)」「ESG(Environment環境・Social社会・Governance企業統治)」の2つをキーワードとして討議を行います。

2. デモ展示・懇話会 11:30~12:00

3. キャンパス見学会 12:00~13:00

\*\*\*\*\*

総会・講演会は、来場ならびにオンラインライブ配信(Zoomのウェビナー機能利用を予定)でのご参加が可能です。また、講演会は上記に加えてオンデマンド配信も予定しております。グループ討議につきましては、対面での開催のみとなります。

講演会・グループ討議の詳細は、開催案内(1月13日配信予定)にてお知らせいたします。講演会プログラムは変更となる可能性がありますので、最新の情報を協議会ホームページにてご確認ください。なお、総会・講演会来場者への資料配布は行いませんので、事前配信資料をご利用ください。

私大環協ニュース

第71号 2021年12月発行

発行・編集



私立大学環境保全協議会  
Environmental Protection Association of Private Universities

〒169-8555

東京都新宿区大久保3-4-1 早稲田大学環境保全センター内

TEL & FAX 03-5273-9605

印刷 (株)研恒社



GREEN PRINTING JFPI  
P-K10002



ミックス  
責任ある木質資源を  
使用した紙  
FSC® C016129

